

スマートフードチェーンukabisによる農産物流通の革新

一般社団法人スマートフードチェーン推進機構
代表理事 折笠俊輔

shunsuke_orikasa@dei.or.jp

ukabis運営事務局 お問い合わせフォーム
<https://www.ukabis.com/contact/>



ukabis

あらゆる食に、新たな価値を。

ukabisとは

近年、高まる消費者の食品の鮮度や品質に対するニーズへの対応、本来食べられるのに廃棄される食品「フードロス」の削減を実現するために、フードチェーン(食の生産、加工・流通、販売・消費、資源循環、育種/品種改良)の変革が求められています。

また、日本の農業は、後継者不足、貿易自由化の中での国際競争力の強化などの課題に直面しています。

こうした課題に対応するため、第2期戦略的イノベーション創造プログラムでは、ICTを活用し、国内外の多様化するニーズなどの情報を従来の産業の枠を越えて連携することで、生産者の持つ可能性と潜在力を引き出し、ビジネス力の強化やサービスの質の向上を図るとともに、需給マッチングや精密農業を通じてフードロスの削減にも資する、「スマートフードシステム」の実現をめざす研究開発に2018年度から取り組んでいます。

スマートフードチェーンプラットフォーム「ukabis」は、このスマートフードシステムを支える生産、加工・流通、販売・消費、資源循環、育種/品種改良におけるデータ共有を可能とする情報連携基盤です。

ukabis運営法人につきまして

ukabisは一般社団法人スマートフードチェーン推進機構にて運営します。

2022年8月8日 設立

＜一般社団法人スマートフードチェーン推進機構＞

住所：東京都千代田区九段南4-8-21山脇ビル10階（流通経済研究所内）

代表理事：折笠 俊輔（公益財団法人流通経済研究所）

理事：名取 雅彦（株式会社マインズ・アイ 代表取締役）

藤井 明（一般財団法人アグリオープンイノベーション機構代表理事）

輪島 智仁（SBIトレーサビリティ株式会社 代表取締役）

和田智之（国立研究開発法人理化学研究所）

監事：島津 秀雄（慶應義塾大学 特任教授）

- ◆ ukabisは、食のサステナビリティを実現するべく、フードサプライチェーンの各プレイヤーのデータ連携に資する社会的なインフラとしてデータ連携基盤を提供します。
- ◆ 最終的には、流通履歴と生産履歴、販売履歴等を結び付け、それらのデータをバリューチェーンの付加価値向上につなげることを目指します。





名前の由来

このスマートフードチェーンプラットフォームは循環経済化を目的に、食の生産、加工・流通、販売・消費、資源循環、育種/品種改良に到るまで、データ連携を可能とすることで新たな価値を生み出したいという思想のもとに生まれました。そこで食のあらゆるシーンに関わり、見守り、成長を支える存在となることを目指して、ネーミングは、陸の恵みである五穀豊穡の神様・宇迦之御魂神(ウカノミタマノカミ)と、海の恵みである豊漁の神様・恵比寿天にあやかった造語としました。



宇迦之御魂神
(キツネ)



恵比寿天
(タイ)



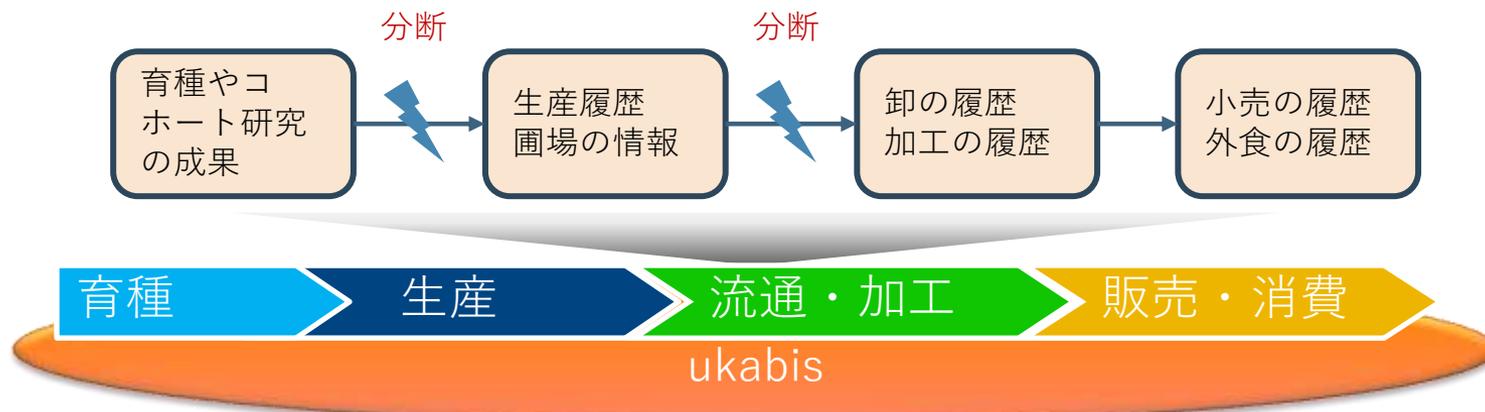
ukabis

ukabisはなぜ必要か？

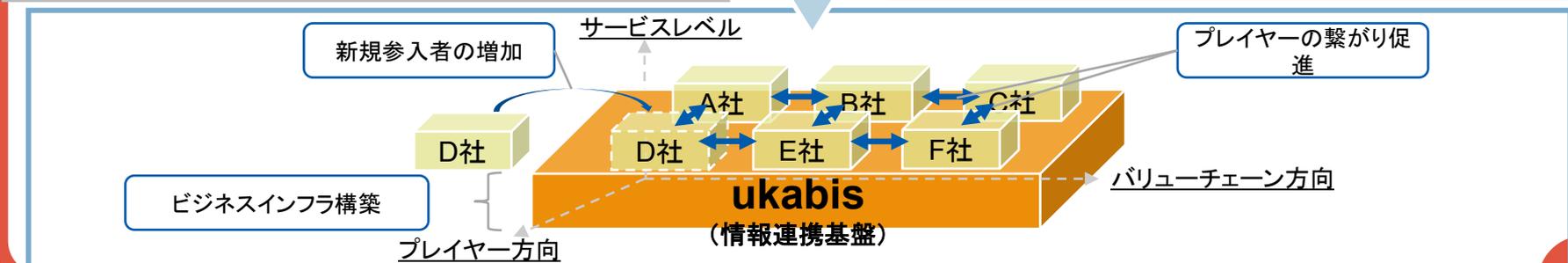
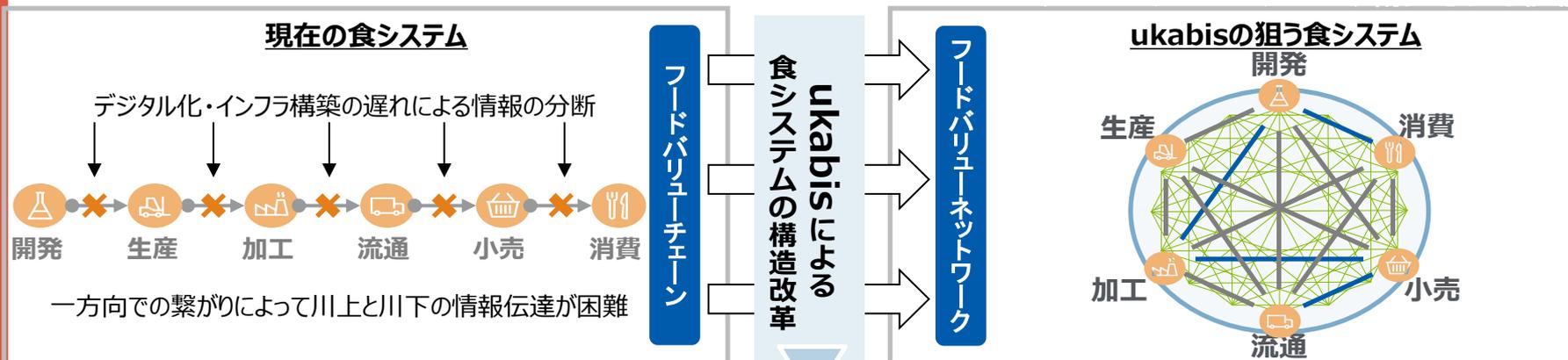
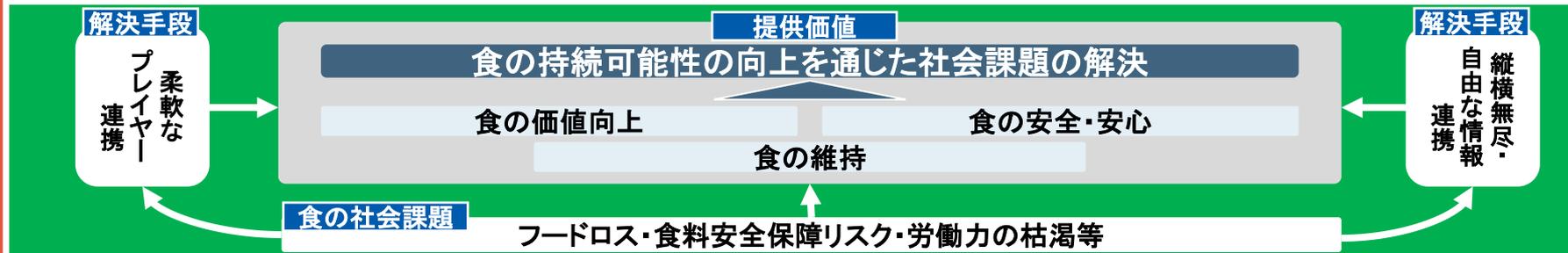
農産物や水産物といった生鮮流通は、卸売市場流通を中心に発展してきたが、現在、輸出も含めた流通の多様化が進んでいます。しかしながら、その商流・物流をつなぐ情報ネットワークは属人的であったり、手書きが中心であったりと効率化されているとは言い難い状況です。

今後、社会から要求される「食の安全性確保への対応」、「持続的な社会づくりへの対応」に加え、持続的な農林水産業の発展に向けた「生産者等の担い手の所得向上」、「農林水産物の付加価値向上」、「輸出振興」を目指していく中では、食のサプライチェーンの情報連携、デジタル化は必須であると言えます。

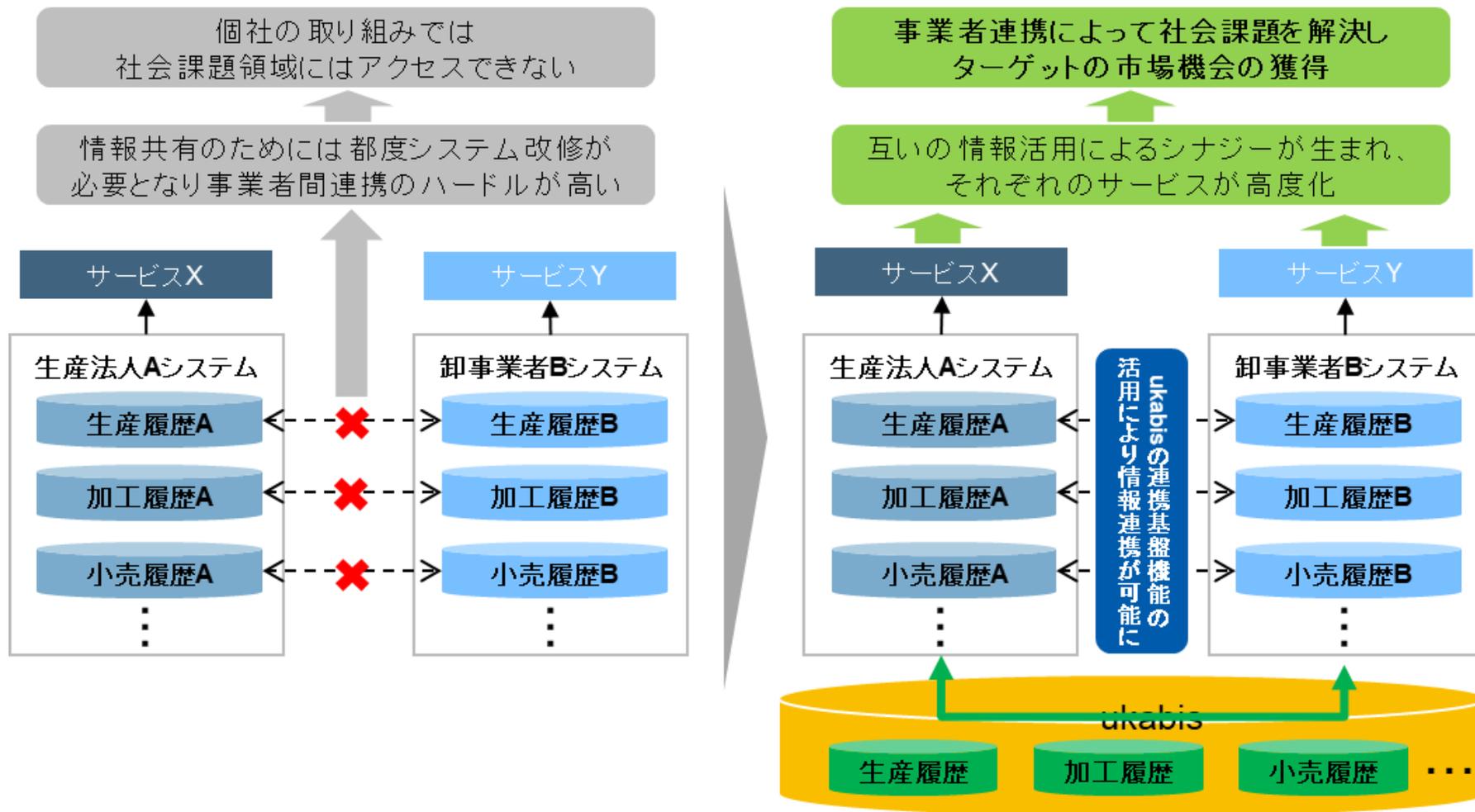
、スマートフードチェーンプラットフォーム「ukabis」は、生産、加工・流通、販売・消費、資源循環、育種/品種改良におけるデータ共有を可能とする情報連携基盤です。



食におけるビジネスインフラである**ukabis**により形成される**フードバリューネットワーク**に 参画事業者は加入することで、様々な社会課題の解決に向けたソリューション提供の事業機会を獲得



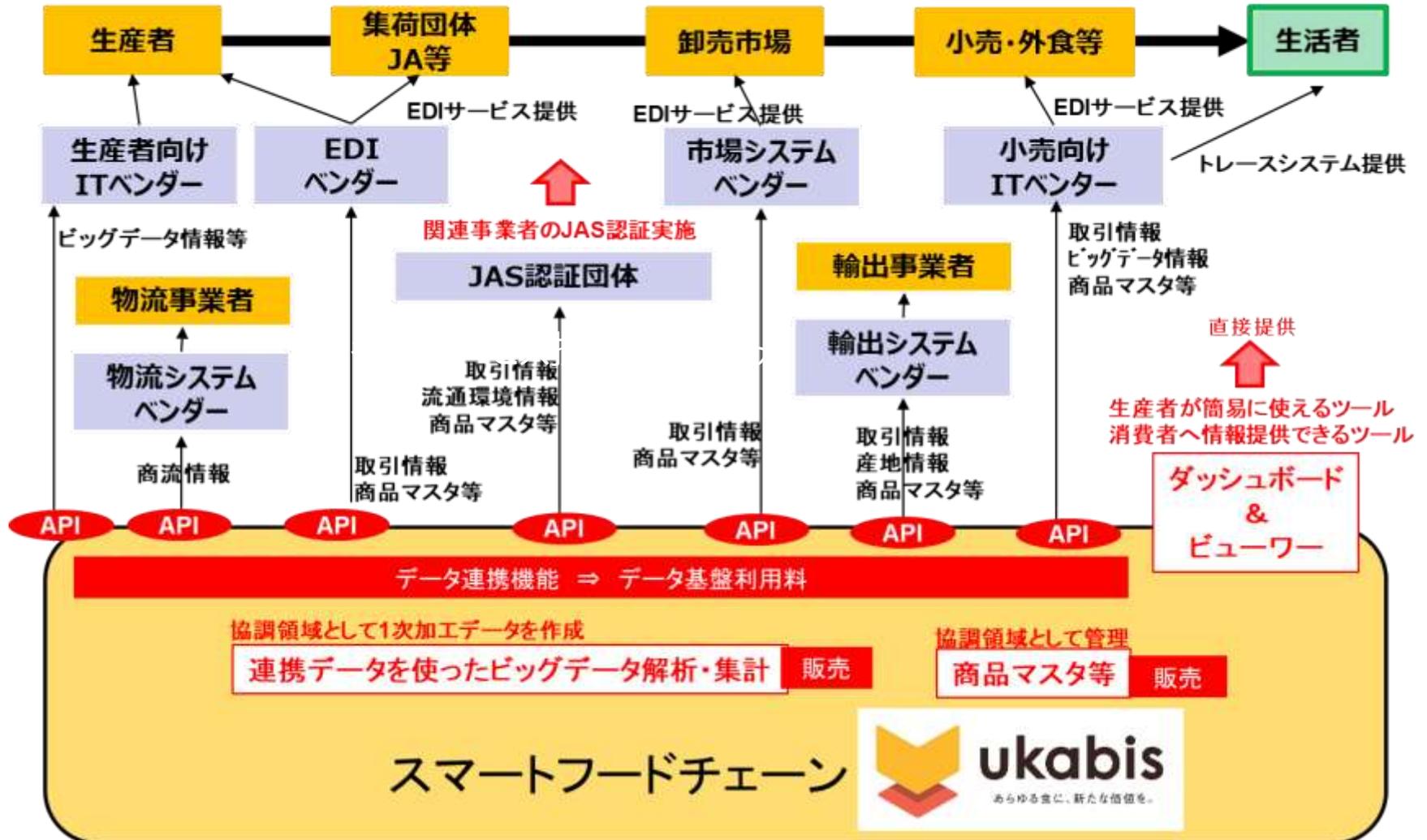
ukabisが実現する**事業者間連携を通じた**各社のサービス高度化により、サービスにとって社会課題解決がもたらす事業機会の獲得や収益拡大に寄与



各種サービス提供の仕組み



各種サービスを提供する事業者の皆様と連携してまいります。





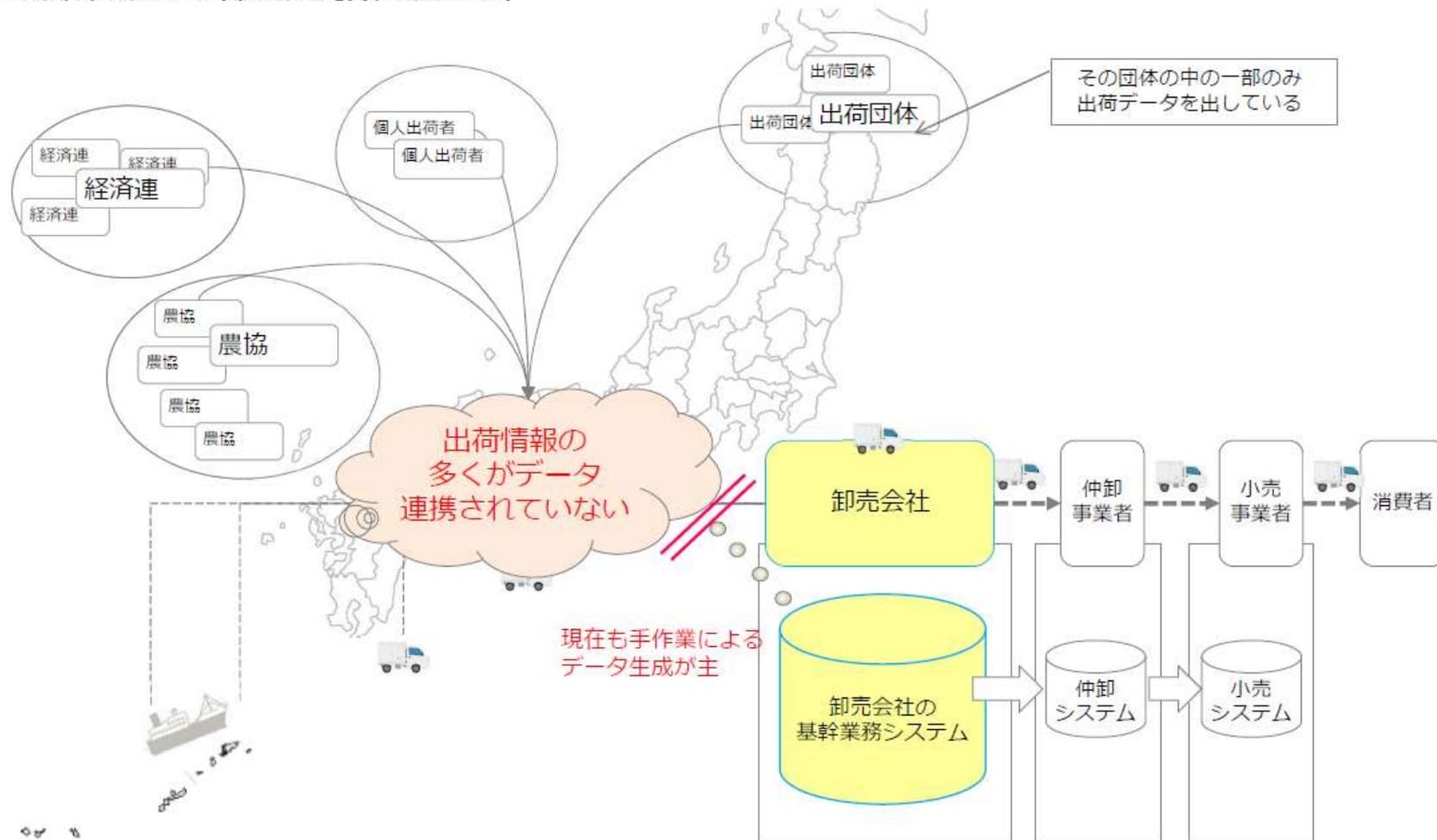
ukabis

あらゆる食に、新たな価値を。

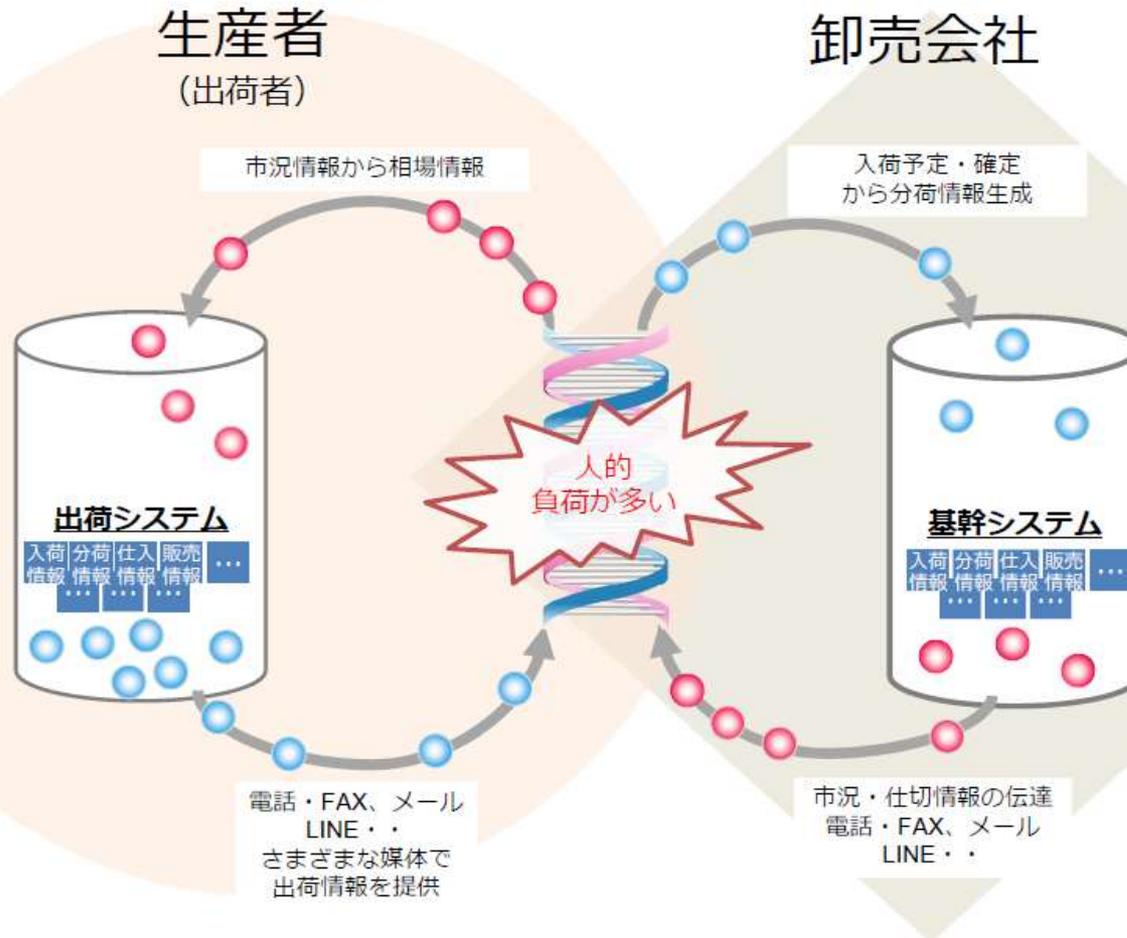
具体的なソリューション等

現在、生産者・出荷者から卸売会社へ送られる出荷情報は逆ビジネスを除くと、依然としてFAX・電話・メールが主となっています。卸売会社は事前に届いたFAXや物についてくる「送り状」を見ながら日々、時間をかけてデータ化しています。

※1=出荷者からの「出荷情報（データ）」は、卸売事業者にとっての「入荷情報（データ）」



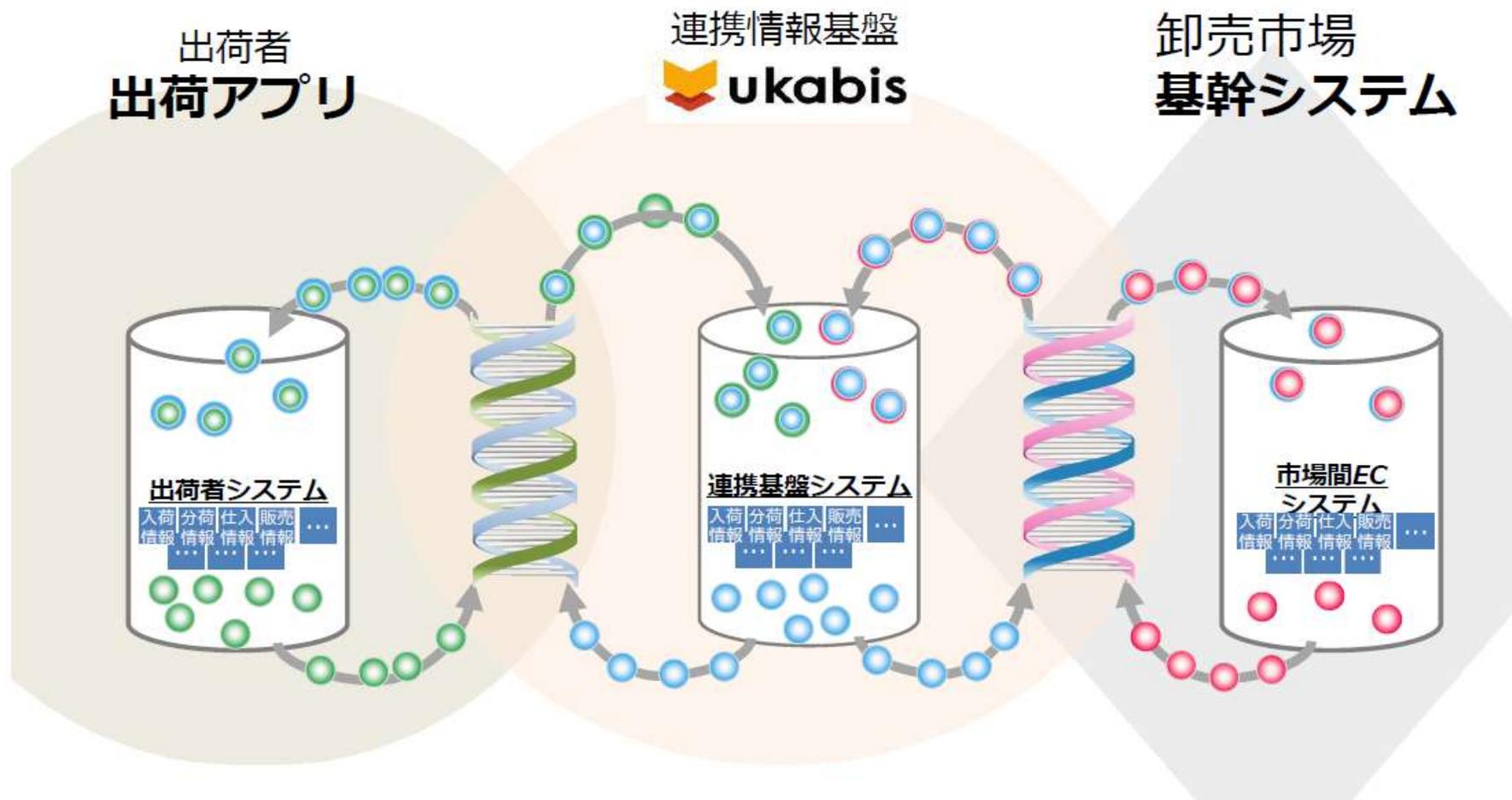
生鮮食品を担う企業の基幹システムプラットフォームは、オフコン→クラサーバ→クラウドへと時代の変化に応じた対応が進んできました。しかし、業者間の「相互業務効率化」を目的としたシステム構築事例は少なく限定的な状況になっています。出荷者様（生産者）と卸売市場間の情報連携においても人的な負荷で対応している状況になっています。



市場のシステム、出荷者の出荷アプリをukabisがつなく

出荷者: 出荷先市場が複数あっても、相手先の市場のシステムに関係なくデータ送信可能

卸売市場: 出荷アプリが多岐にわたっても、ukabis経由で基幹システムでデータ取得が可能。



産地の出荷情報を伝票レスで、データで卸売市場へ連携するシステムを構築、社会実装を進めている

様々な出荷システム

QRコードベース
の出荷システム



出荷情報

API接続

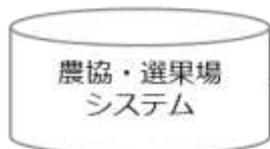
R6:らくらく出荷システム
(セラク様)



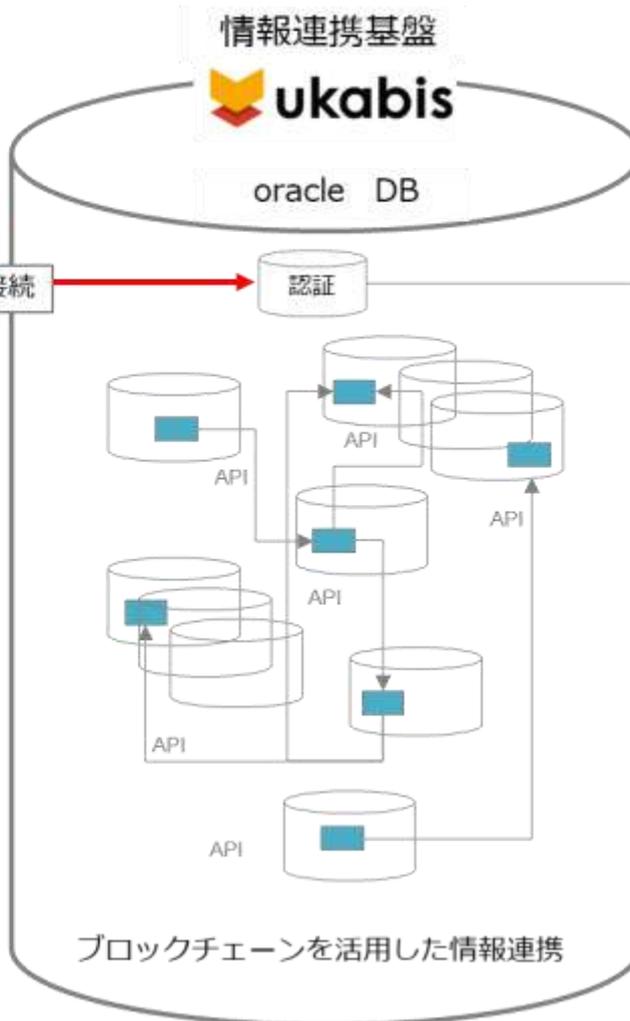
LINEを用いた
出荷システム

API接続

R7 :nimaru (kikitori様)



API接続



認証

API接続

卸売会社
基幹システム

KitFit フルーツ marché

TSUZUKI 都築電気株式会社 + TCloud for Smart 青果

— R6年度まで
- - - R7年度で完了

農家—JA—卸の荷物情報 紙伝票やめ効率化

青果物の入出荷作業の効率化に向け、産地と卸売市場が荷物の情報データをやりとりできるようにする取り組みが動き出している。主流の紙伝票と比べ、実証では市場の入出荷作業時間を3分の1に縮め、数字の間違ひも起きにくくした。人手不足の中でも、営農指導や営業活動に注力できるよう後押しする。

実証では、IT企業など3者のシステムを連携させ、生産者からJA、卸まで一連の入出荷をデータでやりとりできるようにした。産地側はセラク(東京都新宿区)のシステムを活用。これまでは生産者やJAが出荷量を目視で数え、手書き伝票などで集計していたが、品目によってはサイズなどの等階級の組み合わせが30ほどに及び、途中で数量を間違ったりスルもあった。実証では、生産者が出荷箱にQRコードのラベルを貼ってスマート



スマートフォンでQRコードを読み取れば集荷数量を自動で集計できる(セラク提供)

フォンなどで読み込むことで、JAに出荷数が届く。JAでも読み込めば、規格ごとの集荷量を自動で集計。販売先ごとに仕分ければ、送り状も自動送信されるようにした。卸はJAからファクスで送り状を受け取り、入荷量を手入力していた。実証では、都築電気(東京都港区)のシステムでJAからのデータを取り込み、

手入力をなくした。両者のデータは、内閣府の事業で開発された、農産物のサプライチェーン(供給網)に関するデータの共有ができる「ukabis」を通じてやりとりした。卸ごとに使っているシステムが異なっても、JAは「ukabis」にデータを入れるだけで済むよう想定した。卸での入荷集計にか

かる時間は67%削減できた。ファクスを使う必要もなくなるため、事務所での拘束時間も減らせ、営農指導や営業活動に出向きやすくなる。セラクは「仮に流通段階だけや一部産地だけがデータ化しても、大多数が紙のままでは効果は薄い。生産者の段階からサプライチェーン全体で連携することが欠かせない」と指摘。実証結果を基に、全国でデータ化の普及を進めたいとした。(本田恵梨)

輪菊平均物日

輪菊の相場が低迷している。業務向けの引き合いが弱い中で、夏菊の入荷が昨年より早

輪菊の日農平均価格と取引量の推移





ukabis

あらゆる食に、新たな価値を。